

2023 推・帰・社

受 験 番 号	
------------	--

医学部保健学科

小論文 I ・ II 問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は 8 ページです。1 から 3 ページが小論文 I, 4 から 8 ページが小論文 II の問題です。落丁, 乱丁, 印刷不鮮明の箇所等があった場合は申し出てください。
3. 問題冊子の余白は下書きに使用してもかまいません。
4. 解答は所定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

医学部保健学科

小論文 I 問題

次の英文を読んで、問1～5に日本語で答えなさい。

Google has launched a new tool designed to help people prepare for job interviews. The system, called Interview Warmup, is powered by artificial intelligence (AI) methods. The tool creates interview test questions related to several major technology fields. These include information technology (IT) and support, project management, data analytics and online sales and marketing. The tool was created as part of Google's efforts to develop "conversational AI" systems. These systems use messaging technologies and voice recognition to permit users to interact with computers and devices in more natural ways.

Google recently launched Interview Warmup to the public for free. Users first choose the field they are interested in for a practice interview. The process involves users typing or speaking their answers into the system after each question is presented. Video is currently not part of the tool. The system focuses on three main kinds of questions – background, situational and technical, Google explains. Background questions cover a user's past training and job history. Situational questions seek information on how a job seeker has dealt with different career situations in the past. And technical questions cover the specific knowledge and skills a person has.

If the user speaks using a microphone, the tool puts the user's answers into written form. The Interview Warmup system then uses AI and machine learning methods (1) to analyze the answers and provide suggestions for improvements. For example, the system can let a user know when he or she is using important words related to specific jobs of interest. It also identifies the words used most by the interviewee. Google says this information can help job seekers recognize whether using such repeated words can help or hurt them during an interview. For people with (2) privacy concerns, Google says none of the information entered or spoken into the tool is stored or shared. Since the system does not store information, users are asked to copy any answers they want to keep in a separate document.

Jasmin Rubinovitz is a software engineer and researcher with Google Creative Lab. She helped develop the Interview Warmup tool. Rubinovitz explains in a video that there are currently (3) more than 1.3 million job openings in the United States for high-paying technology jobs across different fields. "We found that the one thing job seekers had a hard time with was interviewing," Rubinovitz said. "So we tried to think, could we use machine learning and large language models to build a tool to help you practice for a job interview?" she added. Rubinovitz says the tool is designed to permit job seekers to practice their interview skills in a "safe space" as many times as they desire.

(VOA News, May 25, 2022, "Free Google AI Tool Aims to Improve Job Interview Skills"より一部改変して引用)

- 問1 **Interview Warmup** を利用する際に利用者が最初にすることは何か、答えなさい。
- 問2 **Interview Warmup** の、①費用と②利用可能な回数についてどう記載されているか、答えなさい。
- 問3 下線部(1)に関して、**Interview Warmup** はどのようなことを行うか、具体例を1つ答えなさい。
- 問4 下線部(2)に対して **Interview Warmup** の提供元はどのように説明しているか、答えなさい。
- 問5 下線部(3)は何を示す数字か、答えなさい。

医学部保健学科

小論文Ⅱ問題

1 次の文章を読んで、問1，2に答えなさい。

これからの時代は、人口減少社会であると同時に超高齢化の時代でもあり、それは自ずと“死亡急増時代”，つまり年間の死亡者数が高度成長期などに比べてはるかに多い時代ということの意味する。

高度成長期の1950年代から70年代頃までは死亡者数はおよそ70万人程度だったが、80年代頃から増加基調となり、2000年を過ぎた頃には100万人を超え、現在はさらに急増中で、高齢化率がピークを迎える2040年頃には170万人弱まで増加することが予想されている。文字通り私たちは“死亡急増時代”を生きているのだ。

時代状況との関連を述べると、戦後の日本社会は、人口増加ということと並行して、経済の成長あるいは物質的な富の拡大ということをもつばら目標にして走ってきた。個人の人生にたとえると、社会全体が文字通り「若く」、「上昇、進歩、成長」という方向にひたすら坂道を登っていった。それは「生」を限りなく拡大していくということでもあり、その先にある老いや死といったことにはあまり関心を払わず、視野の外に置いてきた。

ところが人口減少社会となり、物質的な富が飽和する中で経済も成熟化の時代を迎えつつあり、高齢化に伴って年間死亡者数も増加し、ということはずなわち「看取り」が社会の中で日常的な現象となっていく中で、死生観の再構築ということが、日本人全体にとっての大きな課題となっているのである。

どのような死生観を持つかはもちろん一人ひとりにかかっているが、死生観というものは「時間」ということと深く関連していると私は考えている。

人生、つまり人が生まれ、成長し、老い、死んでいくという全体的な過程について人々がもつイメージには、さしあたり大きく二つのタイプがあるように思われる。ひとつは「直線としての人生イメージ」であり、もうひとつは「円環としての人生イメージ」だ。

前者の場合、人生とは基本的に“上昇、進歩する線”のようなものであり、そのこと自体はプラスの意味をもつが、こうした人生イメージの場合、「老い」はどうしてもネガティブな性格のものとなり、さらに死はその果ての「無」への落下という意味合いが強くなる。おそらく高度成長時代を駆け抜けてきた戦後の日本人にとっての人生イメージは、大方こちらに近かったと言えるのではなかろうか。他方、後者のほうでは、人生とは、生まれた場所からいわば大きく弧を描いて元の場所に戻っていくようなプロセスとして考えられる。この見方では、「生」と「死」とは同じ場所に位置することになる。

私にとって、そもそもこうした円環的な人生イメージを具体的に感じるきっかけを与えてくれたのは、『バウンティフルへの旅』という1985年のアメリカ映画だった。主人公の老女は、夫にはだいぶ以前に先立たれ今は息子夫婦とともに町に暮らしている。自分の死がそう遠くないであろうこ

とを意識し始めている彼女は、死ぬ前に一度だけ、生まれ育った場所であるバウンティフルを訪れたいと思うようになる。バウンティフルは遠く離れた田舎の場所であり、今ではほとんどただの草原のようになっているところだ。彼女は周到に計画した上で、ある日こっそり家を抜け出し、長距離バスを乗り継いでバウンティフルまでの旅を「決行」することになる。

このように、「自分が生まれ育った場所を、死ぬ前にもう一度見とどけたい」という思いは、人間の心の深い部分に根ざした普遍的な願いのように思われる。そして、このことを先の「円環としてのイメージ」と結び付けて考えると、彼女にとってバウンティフルは、「生まれた場所」であると同時に、いわば、「たましいの還っていく場所」ともいうべき存在であったのではないだろうか。

私自身は、死生観において最も重要なことは、その人にとってのこうした「たましいの還っていく場所」とでも呼べるものを見出すことではないかと考えている。

いずれにしても、それぞれの仕方で死生観の再構築を行っていくことが、現在の日本において最も根本にある課題であると思えるのである。

(広井良典, 人口減少社会のデザイン, 東洋経済新報社, p252-263, 2019. より一部改変)

問1 筆者が死生観の再構築が必要と考えた背景について、解答欄 -1 に 200 字以内で説明しなさい。

問2 下線部について、解答欄 -2 に 150 字以内で説明しなさい。

2 次の文章を読んで、問1，2に答えなさい。

人間一人ひとりが持つ力は、大自然の破壊力とは比べ物にならないほど小さいものです。人間はいつの時代も大自然に対して無力でした。揺れる地面が建物を破壊するとき、人々は壊れ落ちる建物から身を守るしかありませんでした。大火災が街を飲み込むとき、すべてが燃え尽きるのを待つしかありませんでした。大津波が押し寄せたとき、高台をめざして逃げるしかありませんでした。人間の歴史は、災害に繰り返し打ちのめされてきた歴史であったといえます。

しかし、人間は知恵を持っています。自然災害を天災とあきらめ、その圧倒的な破壊力をただ受け入れてただけではありません。災害が社会を襲うたびに力を寄せ合って被災を乗り越え、新たな社会を再生させてきたのです。市民が市民の命を救い、食料や水、寝る場所を提供し、様々な支援の手を差し伸べあったのです。新たな秩序をつくり、法律をつくり、インフラを整備し、建物を建てなおし、社会を再生させてきたのです。単に元の状態に戻す復旧にとどまるのではなく、元のまちを超えた新たなまちづくりをめざして努力を重ねてきたのです。

災害時とその後の社会の再生の過程には、光もあれば闇もありました。

光を見る人は、人々のやさしさ、思いやりを称賛し、復興の素晴らしさに感嘆の息を漏らしました。災害からの回復と新たな社会を創造する人間の知恵は、いつも語り継ぎの重要なテーマとして扱われてきました。

一方、(1) 災害の闇はどうでしょうか。

新潟県中越地震（2004）、中越沖地震（2007）のあと、被災地の行政と支援のNPO関係者が、「救援物資はもういらぬ」という冊子を出しました。

この冊子は、阪神・淡路大震災以降、多くの物資が被災地に送られるようになったけれども、一つのダンボールに雑多なものが入れられていたり、テレビニュースが伝えた不足物資だけが大量に送られたりして、被災地に混乱を招いた事実を指摘しています。過剰に送られたものの置き場に困り、お金のない被災地の行政がお金を払って倉庫を借りたりする事態も発生していました。このような事実が、防災教育の教材になることはまずありませんでした。教育は支援の素晴らしさや命の輝きといった光を好む傾向があります。闇を闇に葬る傾向があります。

そして今でも、東日本大震災の被災地に古着が大量に送られています。

災害の体験を伝えるとき、こういった支援に困らされた事実もきちんと伝えておく必要があるのではないのでしょうか。

光と闇は、どちらも災害の真相なのです。

災害を語り継ぐということは、光と闇の両方を後世に伝えることです。

災害大国日本の状況を考えると、未来に伝えるだけではなく、同時代の未災地に広げる活動も必要です。災害の悲惨さとその中で生きた人々の強さと弱さ、優しさと醜さ、助け合いと身勝手さ、

政策の成功と失敗を伝え広めていくことが、災害に強い社会を構築していく礎となるのです。

(2) 被災者の語りには、ともすれば家族や友人の死に対する悲嘆と逆境に負けないがんばりや、お互いに助け合う美しさが期待されてしまいます。しかし、それは未災者にとって都合の良い被災者像を、被災者に押し付けているだけでしかありません。大切なのは、彼ら、彼女らが、心の中にある戸惑いや不信、悲しさや怒り、未来への不安などを自然に吐き出し、聞く側の人それが自然に受け入れることができる環境づくりです。多くの人期待するステレオタイプの語りではなく、本音を語る場が被災者には必要であり、未災者はその場において、個人的な思いにただ耳を傾ければいいのです。

(諏訪清二，防災教育の不思議な力：子ども・学校・地域を変える，岩波書店，p118-120，2015．より一部改変)

問1 下線部(1)について，解答欄 - 1 に 80 字以内で説明しなさい。

問2 下線部(2)について，聞き手はどのように話を聞くか，筆者の考えとそれをふまえたあなたの考えを，解答欄 - 2 に 300 字以内で述べなさい。